

栄えあり上峰

学ぶ心
磨く心
鍛える心

上峰中学校生徒指導部だより（文責 矢動丸）R7.7.1

遠回りくらいでちょうどいい

昨日まで県大会出場をかけて試合が繰り広げられた地区中総体。県大会をつかんだチームもあれば、終わってしまったチームもあるでしょう。サッカー部の生徒も、相手チームにひるむことは一切なく、最後の最後まで前へ・・・、何度でも何度でも挑み続けました。

「何度でも何度でも」・・・まさしく、上峰中学校のコンセプトを体現してくれた、後輩たちにとって「誇り」となるような試合をしてくれました。

これまで、チームの中で摩擦が起きたり、競技外のところで注意を受けたり、一生懸命頑張っているつもりでも、なかなか成果が出なかったりと、だいぶ遠回りしましたが、遠回りしたからこそ、彼らは粘り強く、戦えたのかもしれない。

きっとほかの部活動でも、3年生の同じような姿があったことと思います。

「涙」という字は、さんずいに「戻る」と書きます。涙を流すということは、「戻るところができた」ということかもしれません。

今回、3年生のみなさんは、最後まで諦めず、誰かのために頑張る、頑張りを続けることをやりきってくれました。

将来、辛い時、何かに行き詰まった時、「誇りをもてた中学生の自分」「誇りを胸に闘った勇者」に戻ると、また前を向いて立ち上げられることでしょう。

涙は、あなたを、「本来の素直で、頑張る自分」に戻してくれます。

だから、未来の「戸」（とびら）を「大」大きく開いてくれる、「水」（さんずい）と書いて「涙」なのです。

「泣く」という字も、さんずいに「立つ」と書く。立つ・・・戻るところがあるから、いつ

だって立ち上げられる。今回、みなさんがつかみ取った、そんな「誇り」をいつまでも大切にしてください。

エベレスト登山の話。過酷な山エベレスト登山で、遭難（そうなん）して命を落としてしまう人の8割（80%）は下山中だそうです。頂上に登りつくのがあまりにも過酷なため、登り切った時点で、「満足」してしまうのかもしれない。

だから、登山家は、下山中に遭難しないために、登る“前”から、「生きて帰る理由（次の目標）」を、必ず心に決めて登り始めるそうです。

そうでないと、頂上についたときに燃え尽きてしまうから。

みなさんにとって部活動が、生活の重きを占めているならば、中総体はピークであり、頂上かもしれない。

ということは、生きていく上でこれからが遭難しやすいということです。

「燃え尽きる」ことなく、新たな自分の目標をもって、次なる山に登っていけるようにしてください。

勝った・負けたというある意味「前提」を受け止めて、しっかり前を向いて進むのか、前提を受け入れられず下を向くのか・・・。

運命は、あなたの心にあるのです。

「過去と他人は変えられないが、未来と自分を変えられる」

のです。

3年生がんばれ！これからのみなさんの活躍に期待しています。



ルールは味方

1・2年生も含めた全校生徒へ、別の切り口で。この中総体、“上峰中の代表”として、誇りと覚悟をもって勝負に挑むことができたでしょうか？最後まで粘り強くやりきることができた選手は、この先も成長し続けることが期待できます。しかし、ただの勝ち負けに満足して、過度に威張り散らしていたり、浮足立っていたりする選手は要注意です。気を引き締めておかないと、燃え尽き症状を起こしたり、不本意な方向に進んでしまったりするかもしれません。そうならないように、まずは生活の中にある小さな約束事をきちんと守っていくことを再確認したいと思います。

学校にも社会にもスポーツにもさまざまなルールがあります。みなさんの中には、「どうしてこんなルールがなければもっと自由に活動できるのに」・・・と思ったことがある人が多いかもしれません。「ルールのせいで、思うように自分が・・・」ということになるのか。確かに、じゃまなだけのルールもあるかもしれませんが、ルールに反抗ばかりしたり、反抗することが生きがいのようになっているのは、「未熟」と言われても仕方ありません。なぜなら、ルールのすべてが自分の成長や自分を実現することをジャマするものばかりとは言えないからです。中には、そのルールがあるからこそ、自分は成長できる・・・というルールもあるのです。

以前、勤めていた学校で「ルール」について考えさせたことがありました。学級の時間があつたときに、みんなでドッジボールをすることになり、「今日のドッジボールはルールなしでフリーね」と言って始めました。開始直後、ある生徒が相手コートまで入って、相手にボールを当てました。別の生徒は、ボールをもう一つどこからともなく持ってきて、投げ始めました。最初は笑っていた他の子たちも、だんだんと「ズルい」との声。そして、当てられた生徒も「当たっていない！」と言い出す。生徒たちも文句を言いだす。「当たったら外やろ～！」「ル

ールなしやろ？」と言い返すと、「ちゃんとルール守らんと、面白くなか！」と言い出す。「なら、自分たちでルール考えてごらん」と言うと、結局いつものドッジボールのルールに落ち着いたのである・・・。結局、わがままな人だけが楽しむのではなく、みんなが楽しむために子どもたちがルールを決め、ルールを守ることを言い出したのでした。

手が自由に使えるバスケット、ボールを持って何歩でも歩いていいとなったら、一人が独占したり、もみくちゃになったり。おもしろいと思ってやってみたが、全然面白くないし、技術も発揮できません。ネットのないバレーボール、手を使っていいサッカーなどなど、観られたものではないでしょう。

スポーツは、ルールという制限があつて、選手のスキルの成長のもとになっているのです。ルールは自分たちが楽しくできるために（自分の自由を守るために）みんなが不自由を少しずつ我慢し合うのです。

社会人には「社交上の礼儀」というルールがあります。これは一般的に「マナー」と言いますが、これも相手との良好な関係をつくるためだけでなく、自分の成長にもつながります。特に「お礼とお詫びは一秒でも早く相手に伝える」のが社会の礼儀です。

何かをしてもらうのが当然と思っていたら、お礼は遅れます。最近は失敗して「ごめんなさい」と言えない生徒も増えています。相手の気持ちを察することができない人は、「ごめんなさい」が言えなかったり、遅れたりするのです。「礼儀を守る」ということは、「自分本位」「自己中心的」「わがまま」という自分の未熟さをなくしていく訓練にもなるのです。

今、多くの方は「自由」と「自分の快適さ」を何よりも優先しようとする人が増えています。今一度、ルールを守る大切さを考えていきたいものですね。

中総体で本校への応援ありがとうございました。3年生を中心に、とても良く頑張ってくれました。県大会を控えている部活動は、さらに頑張ってください。